

[成果情報名]イノシシの捕り逃がしを防ぐための箱わなの仕掛け

[要約]箱わなの入口からトリガー（蹴り糸）までの長さを 120 cm以上、扉の高さを 60 cm程度、トリガーの高さを 40 cm程度とすることで、イノシシ成獣の捕り逃がしリスクを低減できる

[キーワード]鳥獣被害対策、イノシシ、捕獲、箱わな、トリガー（蹴り糸）、捕り逃がしの防止

[担当]長崎県農林技術開発センター・研究企画部門・研究企画室

[連絡先]（直通）0957-26-4328

[区分]総合・営農

[分類]指導

[作成年度]2015 年度

[背景・ねらい]

多産多死で、学習能力が高いイノシシは、幼獣よりも繁殖能力がある成獣を中心に捕獲しなければ生息数を減らす効果が得られにくい。しかし、一般に成獣は警戒心が強く、わなに接近しても中には入らない場合や、わなに侵入しても扉が閉まりきる前にイノシシが反転したり、わなの奥行（入口からトリガーまでの距離）が短いため、イノシシの腰や臀部に扉が当たるなどして、捕り逃がしが発生する場合もある。この捕り逃がしは、農業被害や市街地出没の加害個体の中で、わなに侵入しない学習個体を増やし、見回りやエサやりなどの捕獲作業を続けてもイノシシが全く捕まらず被害だけが継続してしまうため、捕獲従事者の活動意欲の減退に繋がりがかねない。

そこで、2014 年度のセンサーカメラを用いたわな接近時のイノシシの行動調査結果と 2013 年度から 2015 年度にかけて農林技術開発センターで捕獲した個体調査等から、捕り逃がしを防ぐための箱わなの仕掛けの方法について検討する。

[成果の内容・特徴]

1. イノシシは体重により、成獣（40 kg以上程度）、亜成獣（15 kg以上 40 kg未満程度）、幼獣（15 kg未満程度）におおよそ区分できる（図1）。
2. 最軽量の個体が捕獲された時期とその後の捕獲個体の体重増加の傾向から、本県におけるイノシシの出産は5月頃に始まると推定できる（図1、図2）。
3. イノシシの体重と体長の間には極めて高い相関がみられ、体重が増加すると体長は累乗的に増加する（図2）。（特に幼獣から亜成獣にかけての傾向）
この近似曲線により体重から体長を推定すると、体重が 20 kgの個体（亜成獣）の体長は 85 cm程度、体重が 40 kgの個体（成獣）は体長が 110 cm程度であり（図2）、成獣の捕獲にはわなの奥行が 120 cm以上必要。
4. 上記結果と 2014 年度成果情報（「成果の活用点・留意点」の1項）からイノシシの取り逃がしを防ぐための箱わなの扉の高さ、扉からトリガーまでの距離、トリガーの高さのモデルを作成した（図3）。

[成果の活用面・留意点]

1. 扉の高さを 60cm 程度、トリガーの高さを 40cm 程度とすることで、さらに成獣を優先的に捕獲することができる。（2014 年度 成果情報「イノシシ成獣を優先的に捕獲できる蹴り糸（トリガー）の高さ」）
2. 出産前の1月から4月に捕獲作業を行うことで、成獣および亜成獣の捕獲が進むと考えられる。ただし、捕獲適期については、被害発生時期や食肉等の有効活用の面も考慮すべきであり、今後検討が必要である。

[具体的データ]

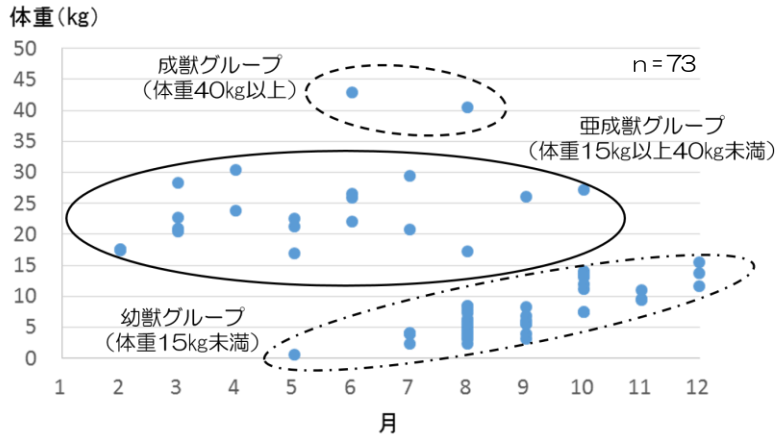


図1 体重によるイノシシのおおよその年齢区分

注) 成獣、亜成獣、幼獣は、歯牙の萌出、体毛の状態、生殖器の発達状況などの外見上の特徴から判別
体長(cm)

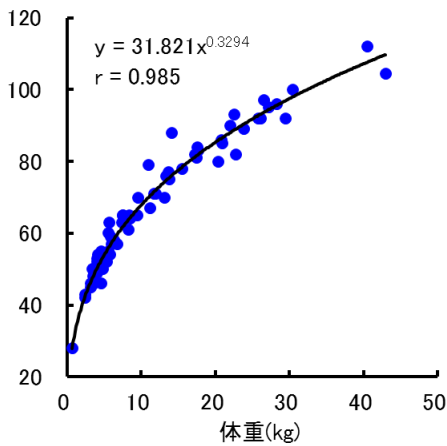


図2 イノシシの体重から体長を推定するための回帰曲線 注) 体長は鼻先から尾の付け根までの長さ

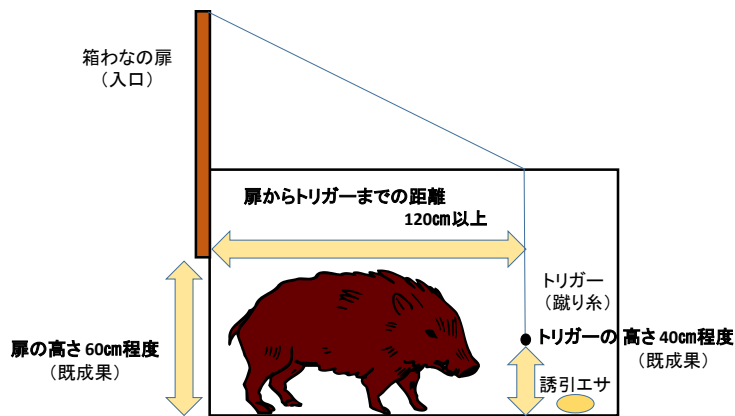


図3 取り逃がしを防ぐための箱わなの推奨モデル (模式図)

[その他]

研究課題名：ICT を用いたシカ、イノシシ、サルの防除、捕獲、処理一貫体系技術の実証

予算区分：国庫（実用技術開発）、県単

研究期間：2014～2015 年度

研究担当者：平田滋樹、神田茂生、山本慶太、林田誠剛、濱口壽幸